

開高健



珠玉

Kaicho Takeshi

文春文庫



文春文庫

珠 玉

定価はカバーに
表示してあります

1993年 1月10日 第1刷

著 者 開 高 健

発行者 新 井 信

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-712711-3

文 春 文 庫

珠 玉
開 高 健



文 藝 春 秋

目次

掌^てのなかの海……………7

玩物喪志……………47

一滴の光……………129

解説 佐伯彰一……………194

珠

玉

掌^て
の
な
か
の
海

もし、今、どこかの退屈しきった雑誌編集部からアンケート用紙が送られてきて、ロンドンについて何でもいいから忘れられないことを三つ書いて下さいと、あったとする。結局はその返事を書かないですませてしまうことになるだろうと思うが、何日間かは追憶を反芻してそこはかとなく愉しむことができるだろう、という気もする。三つめは何を書いてよいかわからないけれど、最初の二つはきまっている。これはうごかないところである。フィッシュンチップスと、夕方の酒場のオガ屑である。

“フィッシュンチップス”はタラとかカレイとか、白身の魚なら何でもいい、

それを乱雑に叩き切って粉にまぶして油で揚げたというだけのものである。ポテトのフライといっしょにして新聞紙の三角袋につっこんでわたしてくれる。ごくぎっかけな食べ物であって、料理といえるほどのものではない。町角のスナックである。つまみ食いのオヤツみたいなものである。ずっと後になって東京で知りあったイギリス人から——この人はケンブリッジ出身だったが——あれは新聞紙に秘密があつてエロ新聞に包んでもらうといつまでもホカホカと温かいけれど、『タイムズ』なんかだとたちまちさめてしまうというんです、というジョークを聞かされたことがある。シン普森のローストビーフも食べたはずなのに肉も皿も思ひだすことができず、こんなフィッシュンチップスの一包みが生きのこつて、いつまでも忘れられない。歩道の人ごみを縫って歩きながらひときれずつつまみ食いしていると、雨がポツポツと沁みて新聞紙の活字がぼやけていったことや、酢が赤かったことや、くずれた白身がいい匂いと湯気をたてていたことなどが、ありありと思ひだせるのである。

もう一つは酒場のオガ屑である。その酒場は通りがかりにふらりと入ったので、店の名も、通りの名も、何ひとつとして思いだすことができない。しかし、白と黒のダイヤ模様のタイル張りの床にオガ屑がまかれてあって、それがまるで雨のあとの森のようにいきいきと香りをたてていたことが忘れられない。酒場はあけたばかりなので客の数が少く、明るい灯がつき、ソーダの爽やかな音がひびき、ジンやウイスキーの香りがクツキリと縞をつくって漂っていた。一日が終ったというささやかだけれど切実な歓びが人の声に感じられ、オガ屑のしっとりした、新鮮な香りを、ああ、いいものだと感じ入ったものだった。これは酔っぱらいの吐く唾や痰をからめとるためで、昔からの習慣である。今の酔っぱらいは教養があるのでおとなしいけれど、昔の酔っぱらいは行儀が悪かったんだよ、という説を聞かされたことがある。東京の酔っぱらいは夜ふけの駅や電車では盛大だけれど、バーやピヤホールで唾とか痰とかを吐いているのはあまり見かけたことがないし、ちょっと思いだすこともできない。『教養』

となると疑わしいかぎりだけれど、そういう光景はおぼえがない。これまでにわたり歩いたバーの数は数えようもおぼえようもないけれど、夕方にオガ屑をまいてたのは、たった一軒だけである。

三十年近くも昔のことになる。

その頃、小説家になって間もなくのことだから、どうやって暮しているものか、教えてくれる人もなくて、途方に暮れていた。知人らしい知人もなく、先輩らしい先輩もない。作品にしたいことが脳か心かにあって夜ふけに白い紙に向って専心しているときは何とかしのげるのだけれど、それが終ってしまつて編集者に原稿をわたすと、いてもたってもいられなくなる。家にじつとしていられない。少年時代の後半期から持越しの、とらえようのない焦躁と不安がメ切日の翌日から流れこみ、こみあげ、小さな青い火で焙^{あぶ}りにかかるのである。家を買った借金は月賦で返済しなければならず、妻と娘の一家三人のための生計は稼がねばならず、それはペン一本にたよるしかない。しかし、書きたいこ

とは何もなく、脳にのこっているのはどんよりした宿酔だけで、使い古しの齒磨きのチューブみたいな皺々の感触である。勉強部屋の窓に射す正当で、いかめしくて、しらちゃけた白昼光を見るだけでそわそわと立ちあがり、台所の妻に何やら口ごもり口ごもり弁解しつつ玄関へかけつけて靴をはく。言葉を見つげるためにと心にいい聞かせつつ靴をはくけれど、戸をあけるとときには、きまって、ふと、スリが外出するときにはこんな気持なのだろうか、と思いがかすめる。

半日がかりで新宿、渋谷、銀座と映画館をつぎつぎ立見して歩く。チカチカ煌めくこの暗闇だけが青い火をしばらく忘れるための応急診療所であった。凡作か秀作かは最後まで見なければわからないとしても、丹念に作ったものかどうかはカット一つを見るだけでわかるので、一カットか二カット見てから立見をつづけるか、空席をさがして坐りこむかをきめることにしてある。ときには満員をかきわけかきわけしてやっと空席を見つけて腰をおろしても青い火がき

つすぎると、そそくさと立ちあがることもある。一つの映画を日を替えて三回も四回も見てやっと全部を見終ることがある。それが凡作なので映画館にその看板が出ている週は毎日その前を通過しつつ早く替ってくれないかと憎みつつけることもある。主役のスターはぼんくらの美男なのでどうでもいいけれど、ときどきしか顔を出さない脇役がどうにも渋くていいので、それだけを見たさに二度、三度かようこともある。シナリオは金言と名言の羅列だけれど、ときどき棘のように刺さってとれない科白せりふに出会うこともあり、そんなときは何日間も平靜でいらなくて膿みつづけることがある。

そうやって、ハシゴして歩くうちに、やっと黄昏になる。人ごみの暗い書斎から出て、歩道に白昼光が消えているのを見ると、ホッとする。頭のなかは何軒も切れぎれに立見して覗いて歩いたために西部劇、寝室コメディ、密林冒険、古代活劇、スパイ・スリラー、ガラパゴス島の海藻を食べるウミトカゲなど、まるで玩具箱をひっくりかえしたみたいにしめいていて、へとへとであ

る。その疲弊が心の火を弱め、酸を中和してくれて、かえってなじめるのである。突然の黄昏が不安をおぼえるほど新鮮に感じられることもしばしばである。焦躁はけっして消えてくれないけれど、長い距離をてくてく歩いて酒場まで抱

いていくことができる。夜は着古した、手放せないシャツのようにしみじみし
ていて、ありがたい。汐留の貸車駅の近くにあるその小さな酒場に入ると、凸
凹の古い赤煉瓦の床にまいた松のオガ屑のしっとりした香りが鼻と肩にしみこ
んでくれる。物置小屋のように小さくてみじめな、薄暗い店で、酒棚には何本
も瓶が並んでいないけれど、毎夜毎夜しこしこと雑巾で拭きこんだ、傷だらけ
のカウンターに肘をのせると、まるで古い革のようにしつかりと、しつかりと、
支えてくれる。その吸収ぶりとオガ屑の匂いだけに誘われてほとんど毎夜のよ
うにかようのである。なぜ男が一軒の酒場にかよいつめるか。説明は言葉でで
きるか、できないかのようなものだが、しいてあげれば、ストウールのすわり
心地と、カウンターが肘をどう吸いとってくれるか、だろうか。それが信号の